

---

# 残酷な結末

晴香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残酷な結末

### 【Nコード】

N8500S

### 【作者名】

晴香

### 【あらすじ】

“鏡花水月”番外編

一護の記憶・霊力を封印すると告げられたルキア達。掟はあまりに厳しかった。

その判決が下ったのは、本当にすぐ後のことだった。

「今、何と仰いましたか…？」

呆然と呟く。

信じられなかった。

それはルキアが考えもしなかったことで、言われた今も信じられぬこと。

「すまない、朽木。もう、決まってしまったことなんだ…」

目を伏せて言うのは、彼女の上司に当たる浮竹である。いつも温和な笑みを浮かべている彼の顔は今、暗く沈み、自分の言っていることを自分でも信じたくはないと言った様子である。

きつと、自身の隊長に敏感な彼等が見たなら、速攻で布団に縛り付けるだろう。そのくらいに顔を青ざめさせていた。

その表情に、冗談だと信じたかったルキアも信じざるを得ない。

「いえ、浮竹隊長が謝ることでは…ッ」

「だが…、君には辛いことをさせてしまう…」

浮竹の言葉に、本来ならば否定すべきとは思いつつ顔を伏せてしまうことを許して欲しかった。

“死神代行黒崎一護の記憶及び霊圧を消す”。

そう告げられたのは、いつも通り浮竹に書類を届けに来た時だった。普段なら笑みとともに菓子差し出す浮竹が、暗い表情で自分に座るよう勧めたのだ。そして、先ほどの台詞を言われ、さらにこう言った。

“その役目が、君に下った”と。

何と酷なことを、と浮竹は眉をしかめる。何故、他の者じゃ駄目なのだろう。何故、一番仲の良い彼女がやらなければならないのだろう。

否、嘘は言うまい。分かっている。仲がいいからこそ、その役割が与えられたのだということ。黒崎一護の記憶及び霊圧の封印を決め、命を下したのは中央四十六室である。彼らは念には念を入れる。その狡猾さは隊長格であれば誰しもが知っていることであろう。

そう、仲のいい彼女が変な気を起こさぬよう、自分の手で記憶置換させるのだ。

浮竹は悔しそうに顔を歪めた。それを分かっている何も出来ない自

分が歯がゆい。

浮竹は目の前で何かを堪えるように俯くルキアを見て、先日の隊主会を思い出した。

黒崎一護には何度も助けられた。正直、彼が居なければ尸魂界が今でも存在しているかどうか定かではない。そんな彼は、死神にとつてすでに仲間なのだろう。橙の髪が自分たちのそばにあることはもはや当たり前で、いなくなるなど信じられぬことだった。

隊主会では、更木が反抗していた以外目立って異を唱える者はいなかった。碎蜂なんかは「上の命令は絶対だ」と言っていたが、彼女の顔にも動揺が見て取れたし、他の隊長も例外ではない。誰もが皆、下された命に納得していないのだ。しかし、納得する、しないは死神には関係ない。上の命令は絶対なのだから。

4

「浮竹隊長…、その…、失礼を承知で言わせてもらいます…」

「なんだい？」

「その命令は、撤回出来ないのでしょうか…？」

その台詞は浮竹が想像していたものと、一文字も違<sup>タガ</sup>ってはいなかった。そして、それに答える自分の反応も。

「すまない…」

死覇装の上の小さな拳が、ぎゅっと握られた。

「朽木隊長…、それ、マジなんですか…？」

墨に筆を浸し、さあ書こうとした時だった。何の前触れもなく、唐突に彼は告げたのだ。

「兄は、私が嘘を言うと思うのか」

眉ひとつ動かさず言う朽木の台詞は変わらない。対して、恋次は目を大きくして愕然としたまま言葉も発せなかった。

「どっ…」

“黒崎一護の記憶と霊圧の封印が決定した”

何の感情も入らぬ淡々とした台詞で彼は言った。まるで、普段の連絡事項を述べるようなそれに、恋次はしばらく意味を理解できなかった程だ。

ポタ、と筆から滴り落ちた墨が紙に大きな染みを作る。だが、恋次はそれに構うことなく椅子から立ち上がった。

「そんなッ、俺には出来ません！」

「十三番隊朽木ルキアがそれを行う。兄は何もせずとも良い」

それにさらに目を丸くして、恋次は朽木の座る執務机の前に立つ。

「隊長は…ッ、隊長はそれでいいんですか!？」

恋次は納得が出来なかった。あの橙色の彼との別れなど想像さえしたことなく、そしてこんなにもあっさりと別れを決められることが記憶を消す。それはつまり、今まで共に戦い、傷つき、励まし、笑い、泣いたあの全ての日々を彼から奪うということだ。

そして、その役目をルキアに背負わせるという。目の前の無表情な彼は、それを享受したというのか。あの叛乱から、義妹との隔たりを失くした彼は、彼女のことを大切に想っていたと見えていたが、それは勘違いだったというのか。

否、偽りのない、不器用な優しさだったが、彼らの間には確かに義兄妹という絆が出来上がっていたように思う。伊達に、六番隊副隊長と彼女の幼馴染をしていない。それなのに。

「隊長！」

恋次は顔を見ていられずに、顔を俯けて叫んだ。

「決まったことだ。我等に選択肢などない」

死神、それは隊長、総隊長例外なく上の命令には逆らうことなど出来ない。数え切れぬ死神の歴史の中に、その例外はない。朽木言外に言っているのだ“諦めろ”と。

「畜生おッ！」

悲痛の叫びが木霊した。



「隊長…、今、何て言いました？」

乱菊は彼の一言が信じられなくて問い返す。その秋の空を想わせる瞳を大きく見開き、お盆に載せた茶はそのままゆらゆらと湯気を上らせている。冬獅郎はその湯呑を奪うように取ると、苛立たしげに言いなおした。

「死神代行・黒崎一護の記憶及び霊圧の封印が決まった」

それによろやく思考が追いついたのか、乱菊は冬獅郎の執務机にしがみ付いて、焦る様に問い詰める。

「意味が分かりません！どうして急に…ッ。まさか、織姫達もですか!?!」

「そうだ」

「そんな…」

乱菊はさらに言い募ろうとして、口を閉じた。湯呑を傾ける冬獅郎の顔が、何かを堪えるかのように険しいことに気がついたからである。周りから見れば、不機嫌なようにしか見えないそれも、何年と

一緒にいる自分には手に取る様に分かるのだ。

「また、上の命令ですか…」

疑問ではなく、確証をもって力無く尋ねたそれに、冬獅郎は黙って頷く。それに乱菊の顔に悔しさが浮かぶ。こういうとき、組織に属す自分に嫌になる。せめて、席次を持たない平の立場であつたらよかつたものの、隊を守る立場では迂闊な行動はとれない。何故なら、隊の命運は自分達の両肩に乗っているのだから。

「日にちはまだ未定だ。ただ、近々行われることは確かだろう」

「封印は誰が…?」

そこで冬獅郎はわずかに目を伏せ、その名を告げる。それにまた乱菊の顔に怒りと悲しみが浮かんだ。

「どづしてッ、上はいつもいつも…ッ」

隊長！と声をあげた。そして手を胸に当てて自らを指し示すと「私が代りにやります！」と訴えた。

「そんなこと、あの子があんまりにも可哀想です！せめて、私が…」

ッ

「駄目だ」

「何故ですか！」

「上はアイツがやることに意義があると見ている」

その言葉に、乱菊は何かを悟ったようだった。

「他の誰でもなく、あいつがやるからこそ……」

もはや、乱菊に出来ることは何もなかった。そして、それは乱菊に限らず、目の前の彼にも。湯呑を持つ手に、わずかに力が籠った。

そうして、無情にも時は過ぎ、とんとんとその音がずっとくくる。

彼は、死神に関する全ての記憶を失った。

「すまぬ…シ、一護」

離れてたって、

魂はお前らを忘れない。

だからさ、待っていてくれよな。

死神になって、

会いに行くからよ。

e n d .

(後書き)

本編にはない、一護の記憶・霊力を封印するという命令が下った時のルキア達の反応を書いてみました。

死神の世界は掟が厳しいってのは、ブリーチの映画第二段で痛感しましたからね。

こんな感じかな、と。

次の番外編を書くときは、封印する時を書きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8500s/>

---

残酷な結末

2011年4月30日10時44分発行